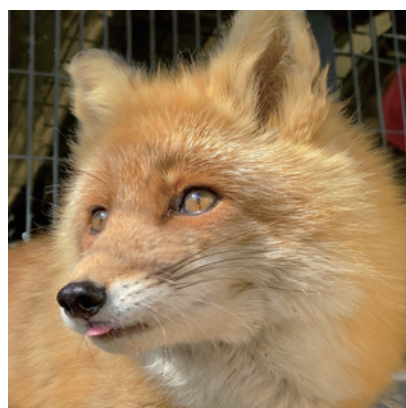
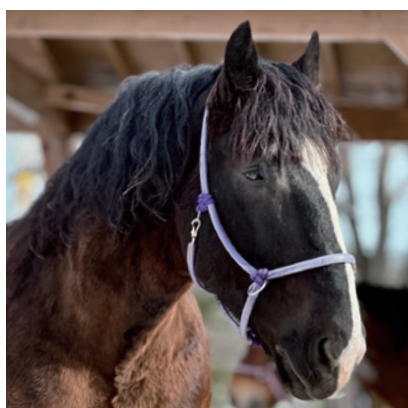
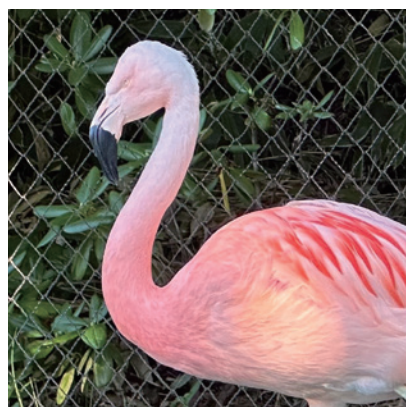
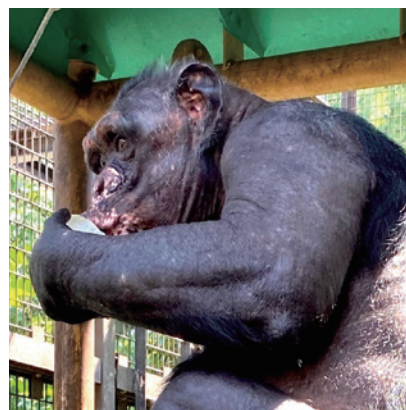
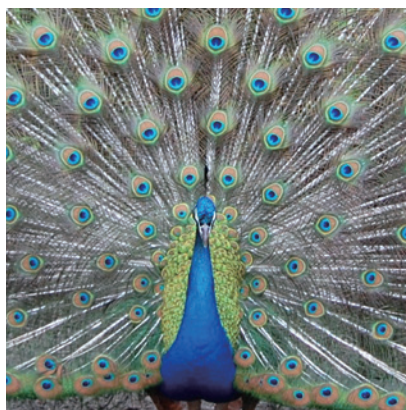
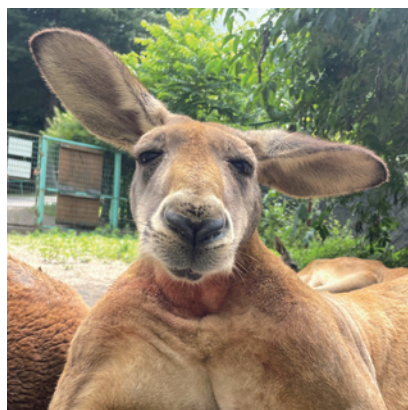




おびひろ動物園のなかま

Animals at Obihiro Zoo

2024



帯広市生涯学習部

おびひろ動物園



国立大学法人 北海道国立大学機構

帯広畜産大学

世界の動物

Animals around The World

チンパンジー

アフリカ西部・中部・東部の森林や湿地、草原など多様な環境に生息しています。野生個体数は約15万～25万頭とされていますが、その数は森林伐採や密猟の影響で減少傾向にあり、絶滅の恐れがある動物です。おびひろ動物園では現在3頭を飼育しており、親子のコミュニケーションや枝を使って餌を食べているところなど、知能が高い行動が見られます。ハズバンダリートレーニングでの健康チェックも行っていますので、見かけた際は静かに見守ってください。



チンパンジーの家族

アカカンガルー



夜行性のため日中は横になっていることが多い

オーストラリアの草原や砂漠地帯に生息しており、世界最大の有袋類です。オスは赤茶色の体色で体重が65kg程度、メスは灰色の体色で体重が25kg程度と、オスの方がかなり大きくなります。走る時はジャンプで移動するので、とても長いアキレス腱が役立ち、省エネで長時間跳ね続けることができます。走るのはメスの方が速いそうで、本気で走ると、時速50km、1度のジャンプで高さ2m、幅は8mも跳ぶことができます。

アメリカビーバー

北アメリカの河や沼などの水辺に生息しています。基本的には夜行性の動物で、おびひろ動物園では、夏は夕方、冬は昼頃から活動します。野生のビーバーの特徴は木や小枝、泥でダムをつくることで、そのダムの中に浮島のようにドーム型の巣をつくります。巣の入り口は水中にあり、天敵の侵入を防いでいます。動物園でも、木を運ぶ様子、巣材をつくっている様子を見ることができます。体と尻尾に脂肪を蓄えるため、寒い季節や冷たい水でも平気です。



枝を運ぶアメリカビーバー

世界の鳥

Birds around The World

インドクジャク

インド、スリランカ、ネパールとその周辺の低山帯の樹林や草原、農耕地に生息しています。クジャクの特徴でもある飾り羽はオスのみに生えており、1羽あたりの本数は100～150本です。メスに求愛するときはこの大きな飾り羽を広げ、羽を震わせて音を立て、大きな声で鳴きながらアピールします。繁殖期が終わると飾り羽はすべて抜け落ち、7か月程度で生え変わります。実際の羽の色は茶色ですが、光を乱反射する角質とメラニン色素の粒によりシャボン玉のような鮮やかな色を見ることができます。



メス(右)に求愛するオス(左)

フラミンゴ



ベニイロフラミンゴ

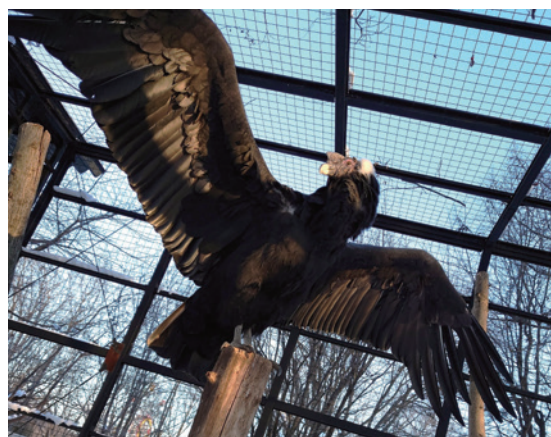


ヨーロッパフラミンゴ

アフリカや南ヨーロッパ、中南米の塩湖や海岸などに生息しており、おびひろ動物園ではヨーロッパフラミンゴ、ベニイロフラミンゴ、チリーフラミンゴの3種を飼育しています。野生では大きな群れをつくり、繁殖期には首振りや翼を広げるなどの求愛ディスプレイを行います。「へ」の字に曲がったくちばしの縁には「ラメラ」という櫛状の構造があり、水中の藻類などをこしとって食べます。フラミンゴの体がピンク色なのは、藻類に含まれるβ-カロテンやカンタキサンチンによるものです。ヒナは灰色をしています。3年ほどかけて大人と同じ色合いになります。

コンドル

南アメリカのアンデス山脈に生息しており、おびひろ動物園では国内最高齢のオス1羽を飼育しています。空を飛ぶ鳥の中で世界最大といわれ、翼を広げた大きさは約3mにもなります。この大きな翼を使って気流に乗り滑空します。雌雄で見た目に差があり、オスの頭部にのみトサカ状の突起があります。頭から首にかけては羽毛がなく、頭を動物の死がいにつっ込んで食べるときに血などの汚れがつきにくくなっています。嗅覚が非常に優れており、左右の鼻の穴がつながる開放鼻孔です。この鋭い嗅覚を生かして、臭いを頼りに食べ物を探し出します。



翼を広げるコンドル

とかちの動物

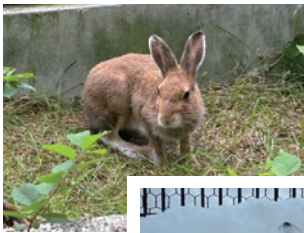
Wildlife in Tokachi

キタキツネ

北海道全域で見られる中型哺乳類で、赤茶色の毛皮と大きな尻尾が特徴的な肉食獣です。本州に生息するホンDIGツネと比べるとキタキツネの方が体が大きく、寒さに適応するために毛がふさふさしており、足先が靴下をはいたように黒くなっています。市街地などにもよく現れるため、人との距離感が課題となっています。野生のキタキツネに餌を与えるなど過度に人が近づくと、本来の餌を探さなくなり人に依存してしまい、交通事故（ロードキル）にあう可能性も高くなります。人にとっても、人獣共通感染症のエキノコックス症に感染する危険があります。



冬毛のキタキツネ



茶色の夏毛

冬毛のエゾユキウサギ

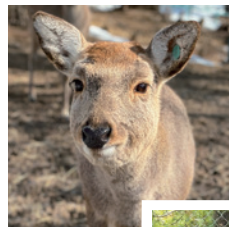


エゾユキウサギ

日本では北海道のみに生息し、本州以南のノウサギと比べて大型で全長が60cmを超えることもあります。換毛によって夏毛は茶色、冬毛は真っ白に変わり、身体のおおくを占める大きな後ろ足が特徴です。森林部に生息するため、人前に現れることは少ないですが、冬になると雪の上に足跡が残り、存在を感じられる生き物です。おびひろ動物園では鳥獣舎で野鳥と一緒に飼育しています。大きな音が苦手な動物なので静かに見守ってください。

エゾシカ

北海道全域で見られる大型哺乳類で、日本のシカの中で最も大きい亜種です。大きな角と、換毛によって夏と冬で毛の色が変わるのが特徴で、毎年3～4月になると角が落ちます。エゾシカの個体数は増加傾向にあり、農作物被害や交通事故が深刻な問題となっています。特に個体数が多い地域では、人間との軋轢も頻繁に発生しています。現在は狩猟による個体数管理が行われているほか、「ジビエ」のように鹿肉を資源として利活用する取り組みも行われています。



メスのエゾシカには角がない



生えたばかりの角は皮膚と毛で覆われている

動物園魅力アップの取り組み

Efforts to Enhance The Appeal of Zoo

馬ふれあい舎

北海道十勝の開拓で欠かせない役割を果たしたばん馬。その展示施設が、令和5年12月、おびひろ動物園にオープンしました。現在2頭のばん馬が暮らす「馬ふれあい舎」は、昔ながらの厩舎構造を参考にしつつも現代の技術を駆使し、馬の快適さと幸せを考え抜いた造りになっています。通気性と断熱性に配慮した木造平屋建ての厩舎は、各馬房に扇風機と自動給水機を設置。繋ぎ場では温水シャワーで水浴びもでき、暑さが苦手なばん馬に万全の配慮をしています。3.6m四方と広めの各馬房の床は、砂利の上に火山灰を厚く敷いた、クッション性と透湿性に優れた造りになっており、毎日敷き詰める麦稈（麦わら）とともに、ばん馬が休む際の快適性を保っています。ばん馬は日中は主に放牧場にいますが、週末には繋ぎ場で来園者とのふれあいも行っています。子供も大人も皆、間近で見るばん馬の大きさに驚きながらも、のんびり優しい雰囲気を感じ、笑顔になっていきます。



2頭並べる繋ぎ場

新キリン館



キリンの寝室



新キリン館の外観

新しいキリン館の特徴は冬期や悪天候時にも観察できるガラス張りの屋内展示室です。1階は、足元からキリンの大きさを体感でき、2階からは、角や目、耳などを観察できるようになっています。2階には透明のフィーダー（給餌器）が設置しており、舌を使って餌を食べる様子を見ることができます。屋内展示室の観覧通路には、アフリカのイメージを再現するために、植栽を配置し、キリンの糞を展示しています。また、キリンが生息しているアフリカをイメージしてもらうために、アフリカに生息するキリン以外の動物の映像をプロジェクターで投影しています。バックヤードは、寒さに弱いキリンが冬期に外に出なくても運動不足にならないよう、十分な広さの寝室を設けました。床は滑り止め加工を施し、座っても足が痛くならないよう砂を敷いています。餌箱は個体の体高に合わせて高さを決められる昇降式となっています。また、キリンが退屈にならないように、窓を豊富に配置し、外を眺められるようにしています。

動物園と大学の取り組み

Colaboration between Obihiro Zoo and OUAVM

北海道産いきもの保全プロジェクト

北海道は日本の中でも、貴重な生態系を持つ地域です。このプロジェクトでは、日本動物園水族館協会（JAZA）に加盟する道内の9つの動物園・水族館が協力して、北海道に生息する野生生物の保全活動を行っています。参加施設は札幌市円山動物園、旭川市旭山動物園、おびひろ動物園、釧路市動物園、小樽水族館、新さっぽろサンピアザ水族館、登別マリンパークニクス、サケのふるさと千歳水族館、AOAO SAPPOROです。その主な活動内容は以下のとおりです。



北海道の野生生物の域内保全・域外保全の推進

おびひろ動物園ではエゾリス、エゾモモンガ、エゾタヌキ、野鳥などの保護受け入れを行っており、地域の野生生物を保護しています。



北海道の野生生物の保全に関する調査・研究

帯広畜産大学などと連携し、各種研究協力のほか「野生生物のロードキル」に関する講演会などを開催しています。



生態や自然保護についての教育普及啓発

フォーラムやオンライン配信を通じて、北海道の野生生物についての啓発活動を行っています。



施設間での職員研修と設備の共有や活用

おびひろ動物園では受け入れが難しい野生生物の保護情報が入った際は、他園館とも情報共有し受け入れ先を探すなどの連携を行っています。

帯広畜産大学サテライトブース

おびひろ動物園と帯広畜産大学は、動物園の活性化と大学の教育・研究の向上を目的に連携事業（おびひろ動物園大学：OZU）を行っています。この一環として、おびひろ動物園に畜大サテライトブースを設置しています。ここでは、動物園で死亡し、大学で死因等の調査を終えた動物の頭骨標本を展示しています。また、十勝の野生生物の痕跡や生態も解説しています。さらに、毎年特別展示を更新しており、近年は、十勝に生息する野鳥の翼標本の展示や、学生サークル「えぞほね団」によるエゾタヌキの骨格標本・生態紹介などを展示しています。



骨格標本の展示



サテライトブースの外観

リーフレット作成協力、資料および写真提供（五十音順）

浅利裕伸、石山絵理花、稲葉利行、片桐奈月、杉本美紀、高橋良江、千葉充規、塚本末悠、富川創平、中山大志、藤澤美緒、前田春花、牧野由巳華、松本朋華、柳川久

* 本冊子は「帯広畜産大学 野生生物保全管理技術養成事業」の一環として作成されました。

事業について詳しくはこちら <https://www.obihiro.ac.jp/biodiversity>



発行日 2024年10月25日